

「……!!」

現れたのは、エナメルで出来た主に青色の装い——ボディコンと呼ばれる衣装に身を包んだショートヘアの女性だった。

晒されている肌は見た目にもわかる程に艶を伴った光沢を放っており、異様を通り越して異質なまでに白い。そこには一片の傷もシミもなく、人の肌だというのに作り物めいた美しさを湛えていた。

下腹部には『ある組織』のマークと『01』という数字が記されており、まるで何かの所有物であるかのような印象を見た者に抱かせる。

凡そ真つ当な状態とは思えない女性  
は意思を無くしたように遠くを見つめ、  
見開かれた瞳の瞳孔は自然とは思えな  
い程に極端に細くなっていた。



——そこは薄い光の灯る部屋だった。

とある島のビルの一室。

財政界・裏社会でも上位の者達の間でのみ噂される、その筋では有名な場所がある。

曰く、ある組織によって捕らえられ、洗脳・改造を施された公安局員がいる。

曰く、退魔師としても凄腕の彼女は、あらゆる組織の情報に精通した情報屋である。

曰く、莫大とも言える金を積みめば、その人形から情報が手に入れられる。

信憑性の定かではない、そんな場所を訪れた一人の男——年の頃は50を過ぎたばかりと思しきその人間は、少々落ち着きに欠けた態度で備え付けのソファに腰掛けていた。

待つこと5分程。

そっと音もなく、いつの間にか横に黒いローブを纏った何者かが佇んでいることに男は気が付いた。

突如現れた存在に息を呑み、まじまじと手元のパネルを見る。

「ほ、本当に……そうなのか……？」

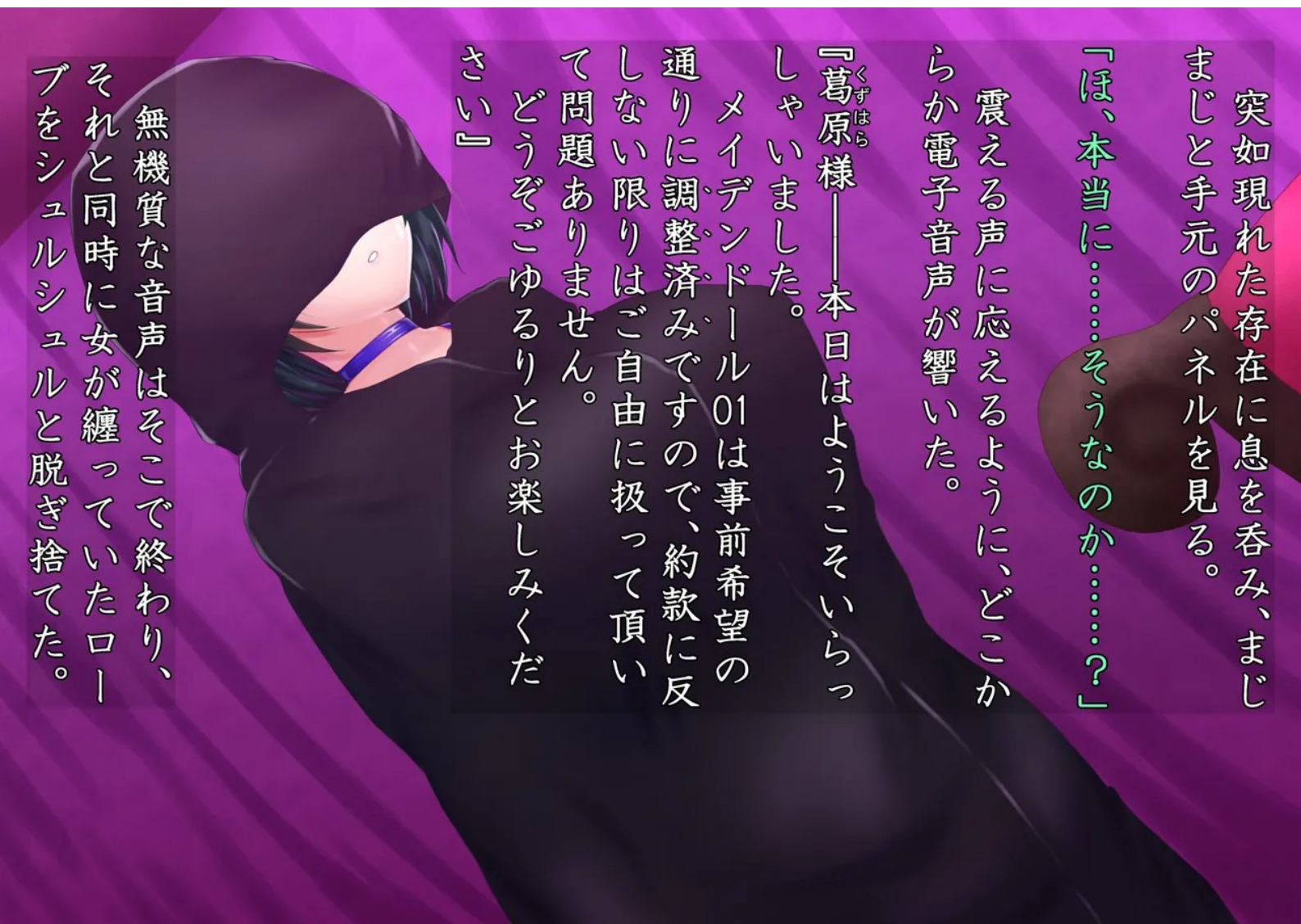
震える声に応えるように、どこからか電子音声が響いた。

『葛原様——本日はようこそいらっしやいました。』

メイデンドール01は事前希望の通りに調整済みですので、約款に反しない限りはご自由に扱って頂いて問題ありません。

どうぞごゆるりとお楽しみください  
さい』

無機質な音声はそこで終わり、それと同時に女が纏っていたローブをシュルシュルと脱ぎ捨てた。



「……!!」

現れたのは、エナメルで出来た主に青色の装い——ボディコンと呼ばれる衣装に身を包んだショートヘアの女性だった。

晒されている肌は見た目にもわかる程に艶を伴った光沢を放っており、異様を通り越して異質なまでに白い。そこには一片の傷もシミもなく、人の肌だというのに作り物めいた美しさを湛えていた。

下腹部には『ある組織』のマークと『01』という数字が記されており、まるで何かの所有物であるかのような印象を見た者に抱かせる。

凡そ真つ当な状態とは思えない女性  
は意思を無くしたように遠くを見つめ、  
見開かれた瞳の瞳孔は自然とは思えな  
い程に極端に細くなっていた。



現れた女性を見て興奮したように男はパネルを操作し、覚醒を促す。

「……………う、あ……………（こ）……………（こ）は……………」

突然意識が戻った女性は今状況が掴めずに、しばらく呆けた様子でいた。それも10秒ほどが経つ頃には落ち着き、目の前にいる人物を認識出来るようになった。

「久しぶりだな……………雪代、葉月」  
「あ、貴方は……………——葛原——ん?」



相手を認識した瞬間、女性——雪代  
葉月はすぐさま取り押さえようとした。  
が——

（なっ——か、身体が、動かない……?!）  
意思とは裏腹に、その身体は直立の  
姿勢から微動だにしていなかった。  
「は……ハハハっ！ どうやら噂は真実  
だったようだな……！」

「噂……?! 一体何を言って——?!」

「自分の身体をよく見てみるがいい」  
嘲う男——葛原の言葉に釣られ、葉  
月は視線を落とす。



「え、あ——な、なに、これ……?!」

ツヤツヤとした肌。肥大化した胸。

視界に映った『自分の身体』が信じられず、葉月の口がわなわなと震えた。

『雪代葉月が奴隷人形——『メイデンドール』に改造されたと聞いて初めは耳を疑ったものだが……これほどまでにわかりやすいものを見られては信じざるを得ないな!』

（め、メイデンドール……?! 島に潜入して5日目——い、いつの間に私、こんなものになっ……?!）

記憶と現状の齟齬に戸惑う葉月を見て葛原は楽しげに笑い、更にパネルを操作した。



——瞬間。

「か、ハッ、はっ、はっ、はっ……いい、  
イク……イクツ——!?」

全身を桜色に上気させ、葉月は  
立ったまま絶頂に上り詰めた。

「強制発情モード……ハハハ、便利  
な機能があるものだ!」  
(なん、で——私、イって——!?)

過程のない、あまりにも唐突な  
性的興奮に、思考がまとまらない



「く、ずは、ら——」

「かつての公安局幹部、そして今は客であるワタシを呼び捨てか？」

「う、あ——葛原、様………!!」

「ハハハハ！汚職の暴露で追放など

と、くだらんことをしよってからに！」

「も、申し訳、ございま、せん、でした」

言葉だけのことではなく、本心から

そう口にしてしまう自らの変化が信じ

られない葉月は、正体不明の怯えを心

に覚えていた。

（か、勝手にへりくだってしま……  
な、なんなの、私、一体どうして——!?!）



「まあいい。今日はたっぷりと楽しませてもらおうか」

そう言いながら用意されているベッドに移動した葛原は葉月を招く。

「か、畏まり、ましたっ……」

逆らってはいけない。従うことは当然のこと——そんな風に感じてしまふ葉月は、震える声で応え、招かれるままにベッドの上の葛原に跨る。

その様子を見て葛原は心底愉快という笑みを浮かべ、自らのイチモツを葉月の秘所に遠慮なく突き入れた。



「う、くふうん——ッ♥」

挿入された瞬間に軽く達した葉月の  
ワレメから、蛇口を捻ったように粘度の  
高い愛液が次々と溢れ出す。

「く、おお……挿れた瞬間にこれとは、  
想像以上だ……!!」

（本当に、何なの……!! 私の身体、どう  
されてしまったの……!!）

自動反応のように蜜でコーティング  
を施した自らの身体の不気味さを改め  
て思い知る葉月。

胸から溢れる母乳を指で絡めとりな  
がら、葛原が愉しげに問いかけた。

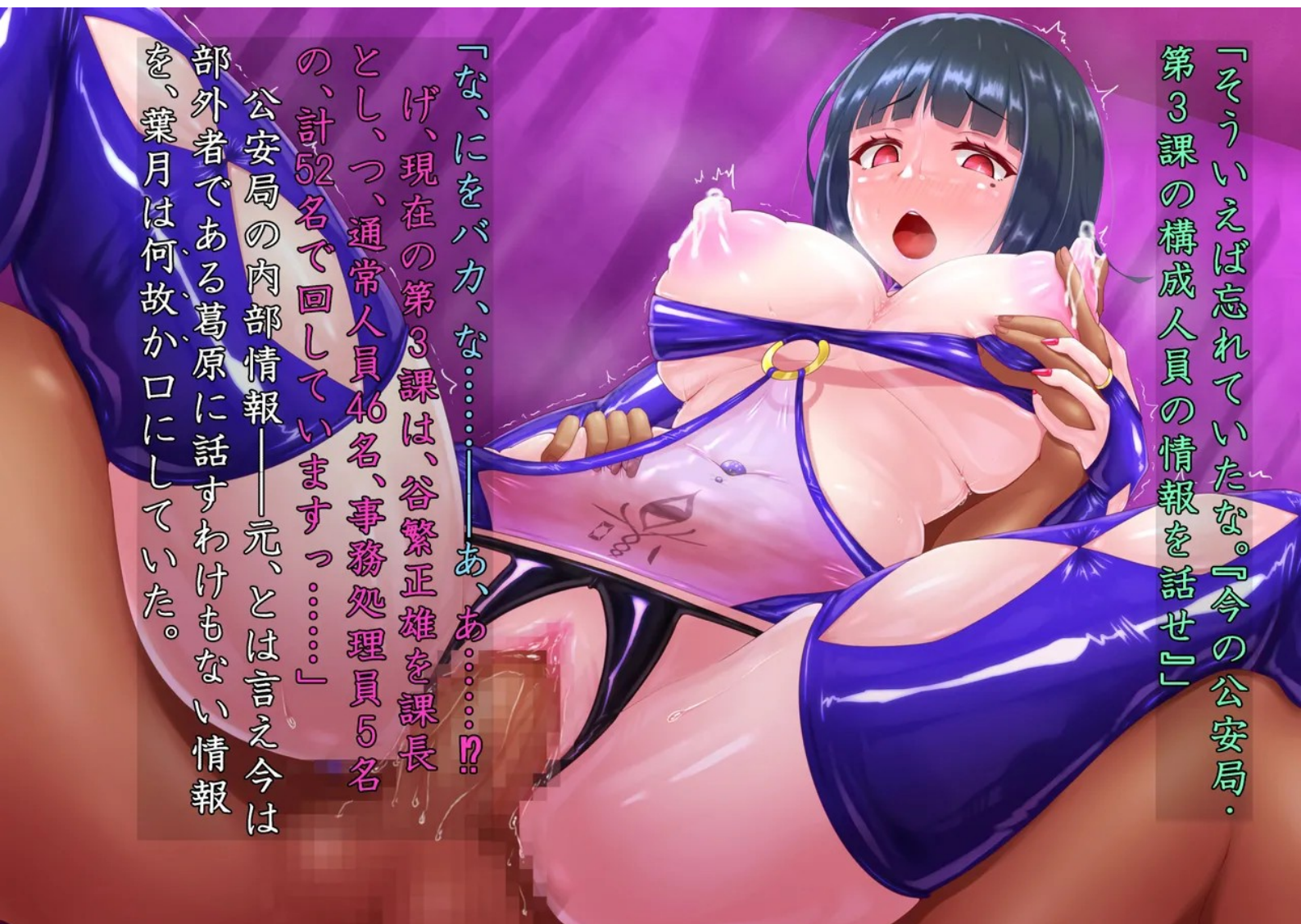


「そういえば忘れていたな。『今の公安局・第3課の構成人員の情報を話せ』」

「な、にをバカ、な……あ、あ……!!」

げ、現在の第3課は、谷繁正雄を課長とし、つ、通常人員46名、事務処理員5名の、計52名で回していますっ……」

公安局の内部情報——元、とは言え今は部外者である葛原に話すわけもない情報を、葉月は何故か口にしていた。



「なるほど……今は谷繁が第3課の長か。  
ふふふ、出世したものだな」

「何を——私に何をしたのッ!! 答えなさい……!!」

「ワタシは何もしていないな。だが、聞くところによると『メイデンドール』は瞳が紅くなっている時は命令に逆らえないそうだ」

「なっ——!?」



「何故、などとは聞くな。理屈はワタシにはわからないのだから。ハハハハッ！」

信じがたい内容。だが、現実はその通りになってしまっている以上、それは紛れもない事実だった。

「う、そ……私、そんなことまで……!?」

「ふふッ……そろそろ私の1番の目的を果たさせてもらおうか」

とびきりの楽しみを行う——そんな意気込みの葛原が腰を積極的に動かし始める。



「う、くあぁっ♡やめっ……くぅッ♡」

激しいピストンに下半身が持ち上がり、リズムカルな刺激が膣肉に襲いかかる。擦り上げられた改造媚肉から生まれる悦楽が電流のようにあっという間に全身へと伝播していった。

「んあぁッ♡♡こ、んなの、いやぁっ……」  
「いい気味だな雪代ッ！ だがお楽しみはこれからだぞ……ッ！」



葛原の言う目的は葉月には知る由もないが、おぞましい悪寒が背筋を走るのをはつきりと感じていた。

「あああッ♥はあ、はあ♥だ、めっ、私、

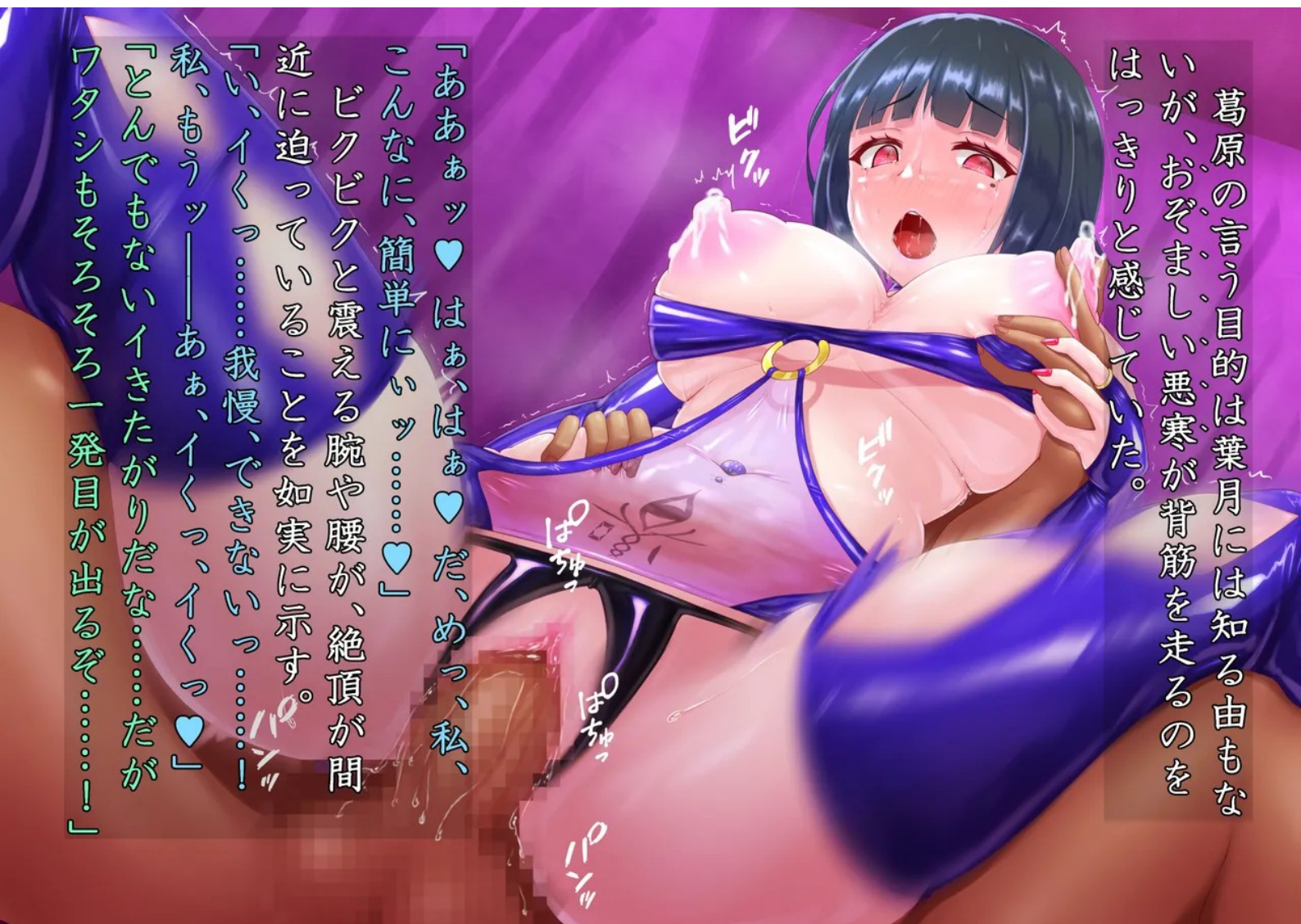
こんなにな、簡単にいッ……♥」

ビクビクと震える腕や腰が、絶頂が間近に迫っていることを如実に示す。

「い、いくっ……我慢、できないっ……!!」

私、もうッ——ああ、いくっ、いくっ♥」

「とんでもないイきたがりだな……だがワタシもそろそろ一発目が出るぞ……!!」



膨れ上がる絶頂感と嫌な予感に心を乱されながら、葉月の身体の痙攣がひととき大きくなった。

「ぐ、うううううッ♡♡♡イクイクイクッ♡」

「そうダイけ！ワタシの子種で無様にイけ！」

ギュウッ、と万力のように膣肉が収縮し、射精を促し、そして。

「ああああああーッ♡♡♡」  
臨界点を超えて、弾けた。





爆発が起きたかのような衝撃。  
全身から靈力を放出しながら、葉月がこの  
日初めての腔内射精絶頂を味わう。

「お、ほおおっ……♡あ、か、あああ♡♡♡」

その瞳には何かの光が明滅しており、葉  
月の様子が目に見えておかしくなっていく。

「あああああ♡♡♡いや、いやあ♡♡♡」

それはまるで、見たくないものを見せら  
れている——そんな拷問のようでもあった。  
「そう、そうだ……お前のその表情が見たか  
った……!!」



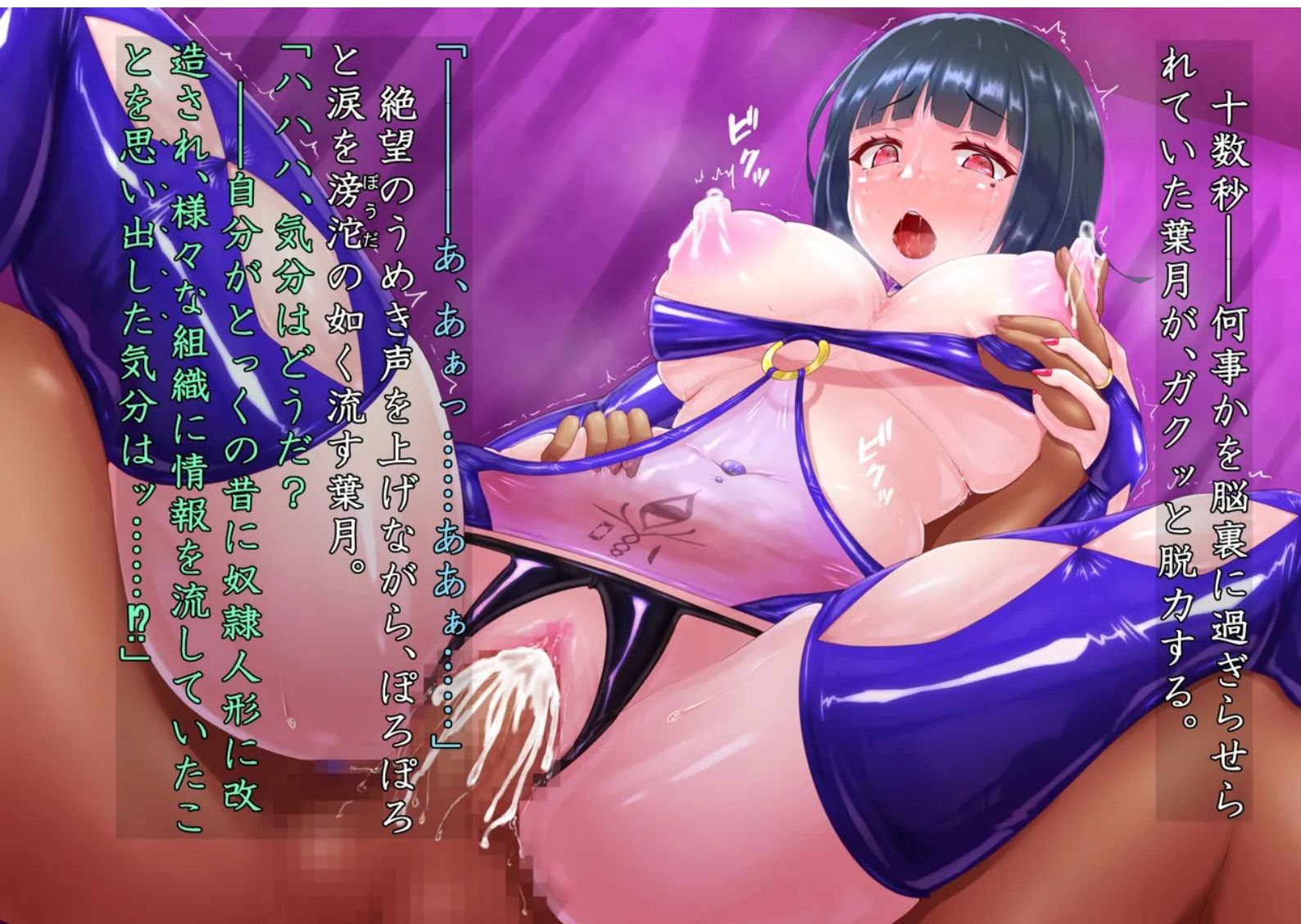
十数秒——何事かを脳裏に過ぎらせられていた葉月が、ガクツと脱力する。

「あ、ああっ……あああ……」

絶望のうめき声を上げながら、ぽろぽろと涙を滂沱<sup>ほうた</sup>の如く流す葉月。

「ハハハ、気分はどうだ？」

——自分がとっくの昔に奴隷人形に改造され、様々な組織に情報を流していたことを思い出した気分はッ……!!」



葉月が見せられたもの——それは自らがメイデンドールに改造され、幾百度も同意絶頂を繰り返し、身も心も屈服していくその様の『全て』であった。

「是非教えてほしいものだな！改造が終わる前の意識のままで、自らが既に完全に屈服し、人間を辞めて人形に成り果てたという事実を知った感想を!!」  
「わ、たし……そう、そうだ……わたし、もう、ずっと……課長も、襲って……姉さんも騙して……!」



「くく……はははッ!! いいぞ、いいぞ!  
我ながら無理な注文をつけた自覚があ  
ったが、まさかこんなことまで出来る  
とはな!!」

「『メイドンドール』というのは本当に人  
間を逸脱しているなあ!! そんなちぐはぐ  
な意識状態なのにそれでも正気とはな!」  
「ああ……う、あああつ……」

かつて内部告発で更迭した犯罪者から  
罵られ、言い返すことも出来ずに葉月はた  
だふるふると震え続けている。



「ああ、生意気な小娘への意趣返しは実に爽快だ。さて、ではそろそろ『情報』を引きだすでしょうか」

「ああ……だ、れか……あああッ♥」

叶わない——叶いようもない望みを続ける事も出来ず、再び動き出した葛原の腰に葉月は甘い嬌声と、意識の上では知らないはずの情報を上げ続けた——。





四時間三十五分後——





「~~~~ツツ♡♡♡♡セキユリ  
ティコードはあツ♡♡♡♡96F  
5CIG8Kですう♡♡♡♡」

数時間に及ぶ情事。一つの組織が傾きかねない程の重要情報を次々と吐き出した葉月。

計86回もの絶頂の最後で、葉月はまた一つグレーな民間会社のセキュリティコードを葛原に教えた。  
「ハア、ハア……ハハハ、なるほど。これでまた一つ動きやすくなるな」  
「はあ♡はあ♡はあ♡——あ、あ……」



自らが引き出したい情報を全て聞き終えた葛原は満足し、一息をつく。

「……………」

「……あ、え、……………か……………て……………」

喘ぎ声にも似たか細い声。それが何かの訴えであることを感じた葛原は短く命令した。

『はっきりと思いを口にしろ』

その言葉に、ビクン、と葉月は震え、



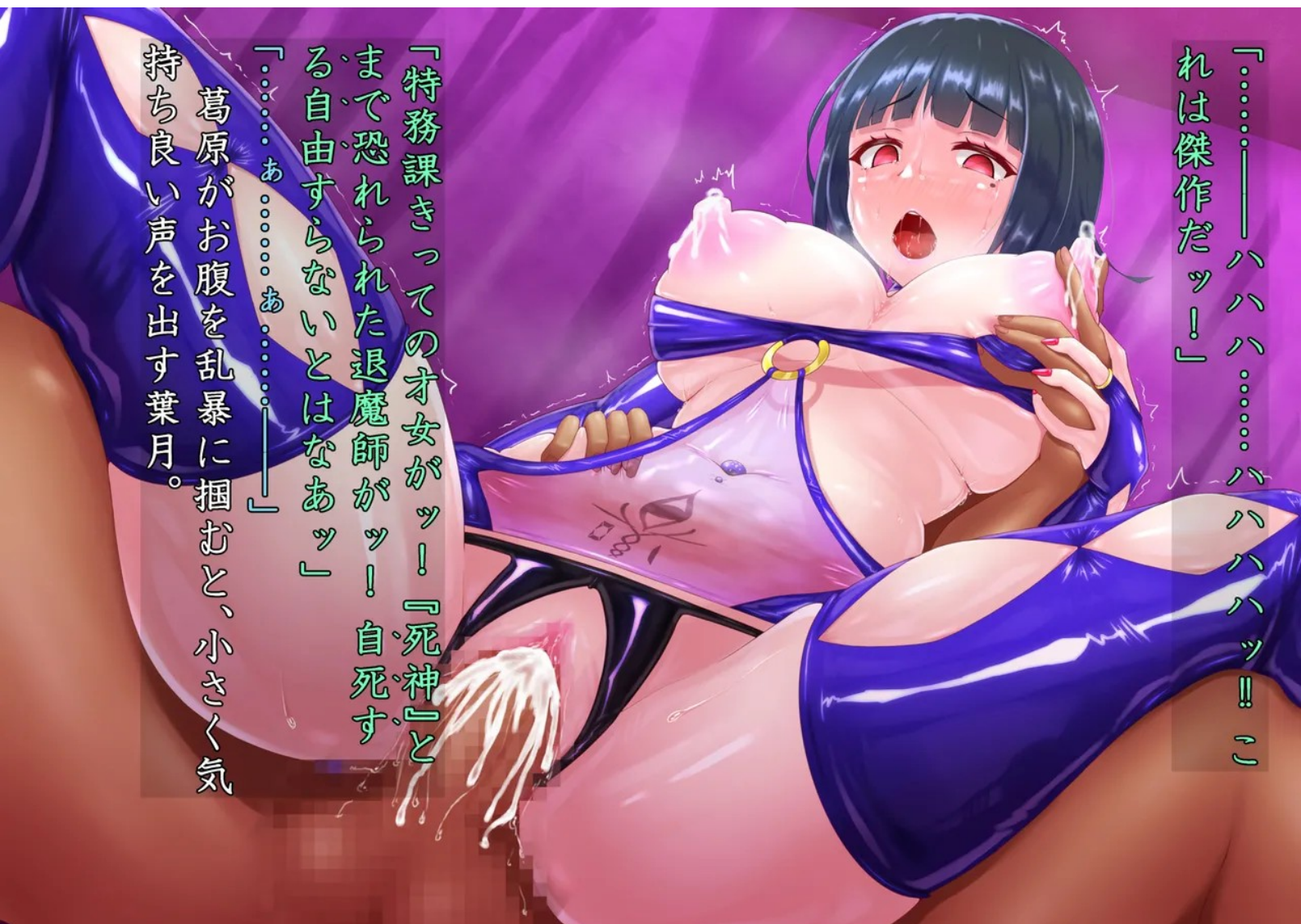


「……ねえ、さん……おね、がい  
……わたしを、ころ、して……」

「……………ハハハ……………ハハハッ!!こ  
れは傑作だッ!」

「特務課きつての才女がッ!『死神』と  
まで恐れられた退魔師がッ!自死す  
る自由すらないとはなあッ」  
「……………あ……………あ……………」

葛原がお腹を乱暴に掴むと、小さく気  
持ち良い声を出す葉月。



「ならばワタシが死ぬまで使ってやるぞ  
……! 『ワタシのモノになれ!』」

「あ、ガッ……!! わ、たし、は、くずはら、  
さまの、も……の、には、ならないいっ♡」  
もはや深層心理にまで根付いた『組織』  
と『主人様』への忠誠と、対象者の命令  
を遵守する『絶対服従モード』が葉月の中  
でせめぎあい、ガリガリと心を削る。



「命令に従えッ!」『お前は何だッ!?』



「いが、ぎッ! わ、わたしは……メイド  
ン、ドール……ま、ご主人様の、奴隷、人形  
ですっ……!」

「今は目の前のワタシがご主人様だらう!!  
『ご主人様の命令は絶対だッ!』  
「く、ずはら、さまがアッ……ま、ご主人様  
……?」

常人であれば——否、たとえ並外れた心を持つ者であっても精神が壊れる程の矛盾条件。

それでも、今この場に於いては徐々に天秤が傾いていく。

「そうだ、今はワタシの命令が絶対なのだからな！」

「あ、あぁッ……♡わた、しは……くずはらさまの、モノ……！」

「何度でも命令してやるぞ……『ワタシのものになれッ！』」

「……♡♡♡私、は、く、葛原さまの……モノお♡♡♡」



葉月の深層心理の忠誠が、目の前の男に塗り替わっていく。

「く、ハハハッ！ いいぞ、お前をワタシのものにして、いずれはメデムさえも手の中に収めてやる……！」

メラメラと燃え上がる野望を糧に、葛原は腰の動きを一層速めた。

「あ、あっ♡ 葛原、様♡♡♡ イく、イきます♡ 私、イって——な、何か、変わって、します♡♡♡」



「そうだ、変われ！ワタシのものになるの  
だ、お前はワタシの奴隷人形だぁッ!!」

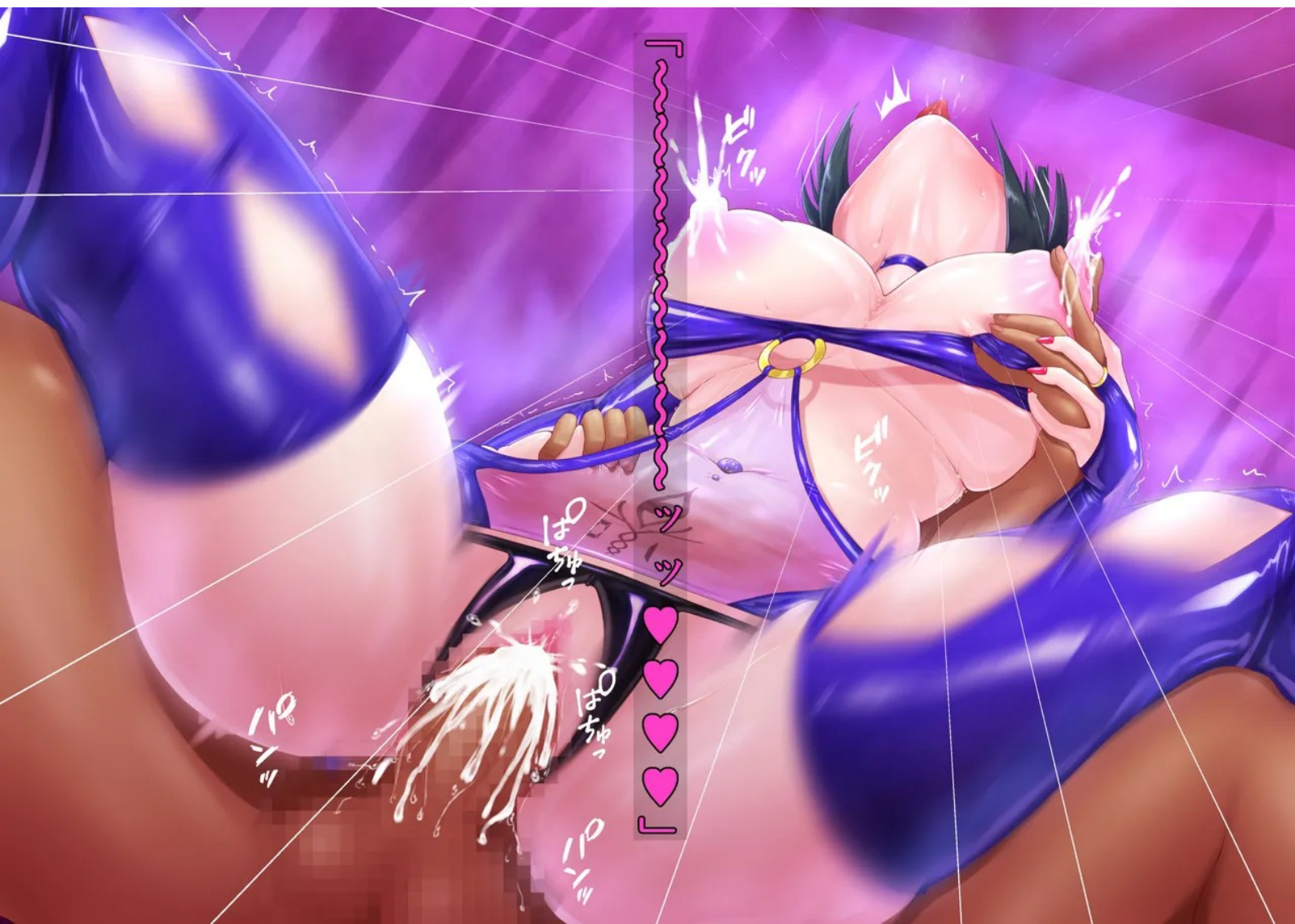
ぐりい、と一段強く突きこまれた怒張が  
葉月の子宮口にキスをする。

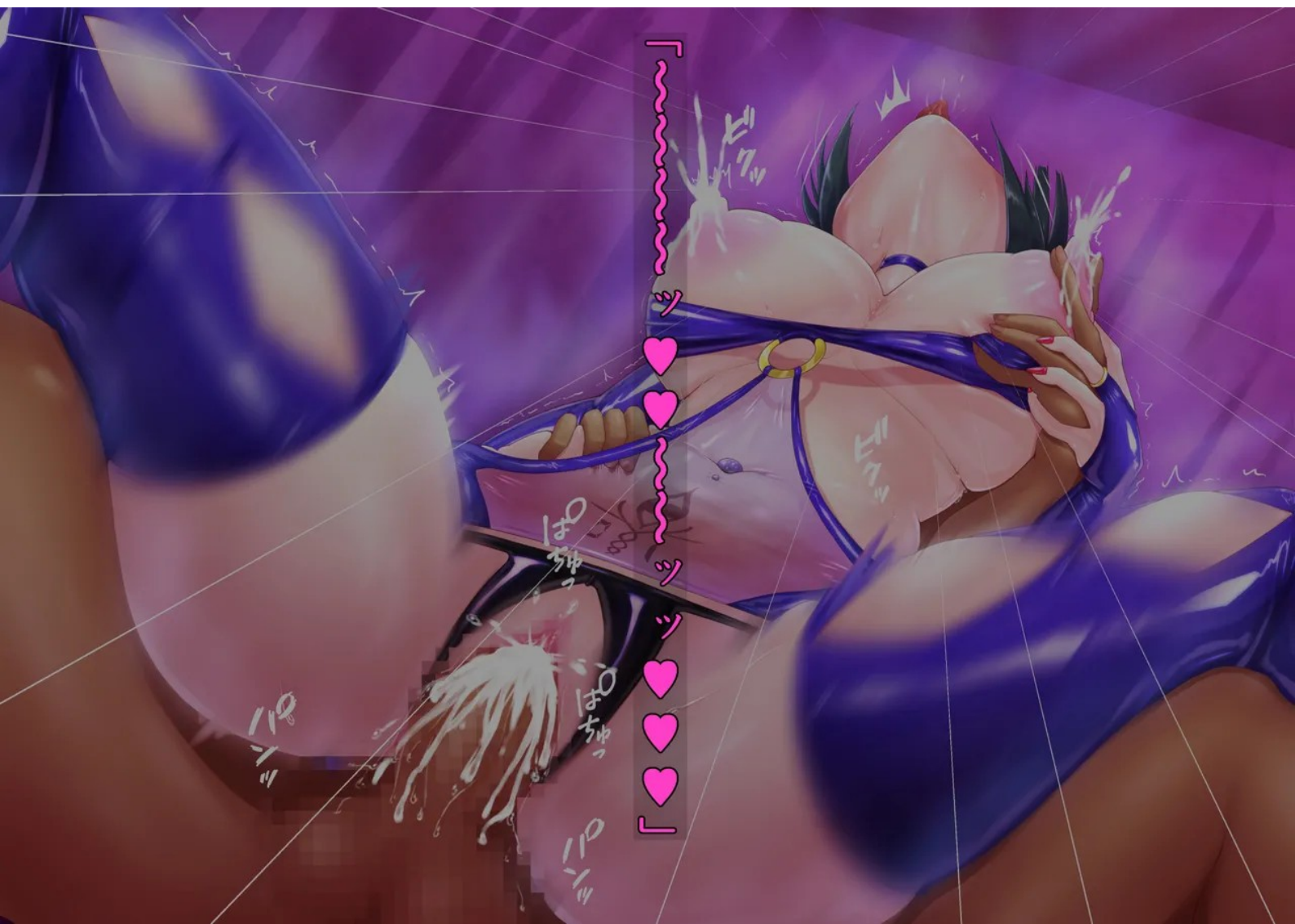
瞬間――

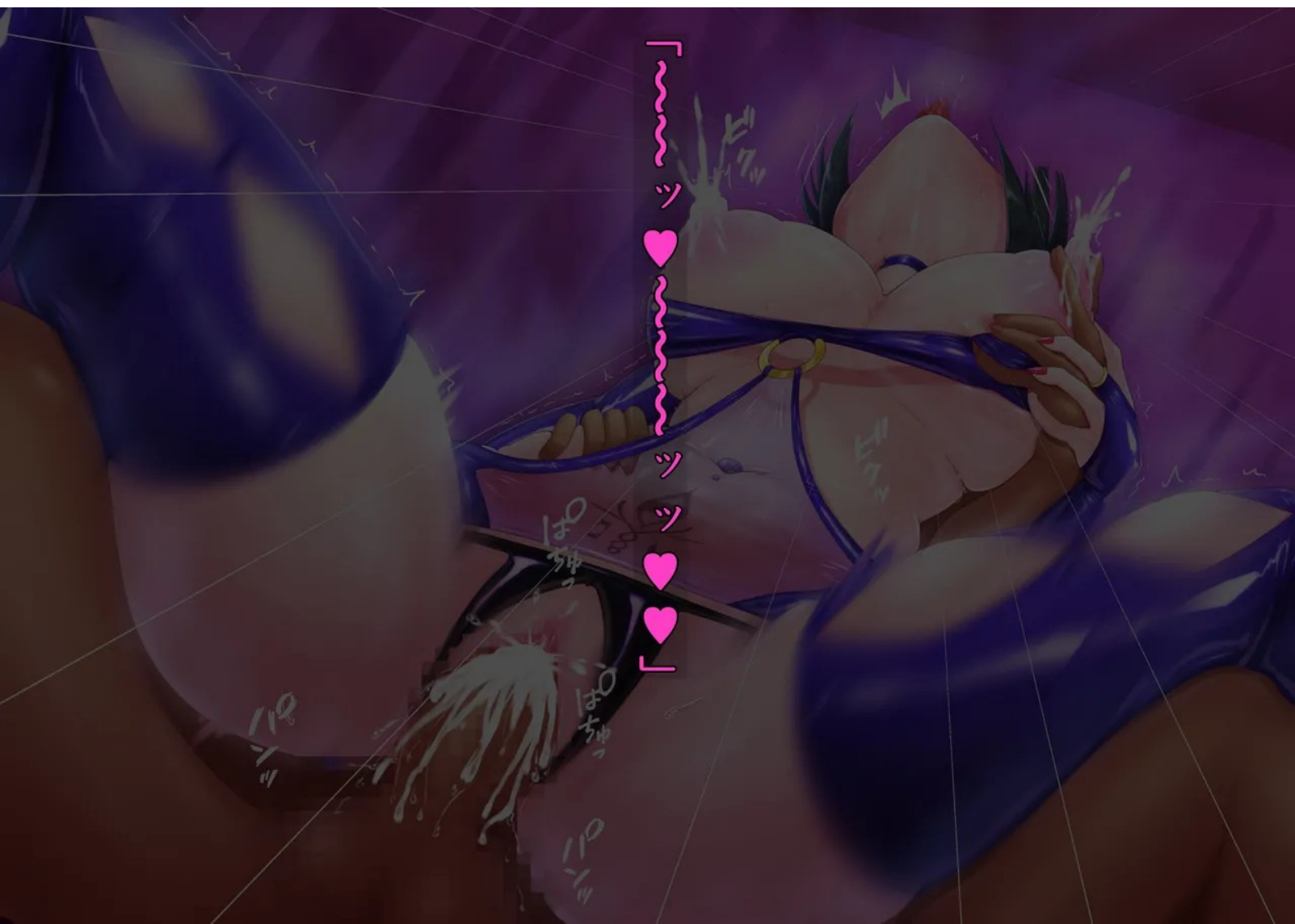
「いぎいッ♡♡イ、イイ――」ハッ

葉月の視界が、弾けた。

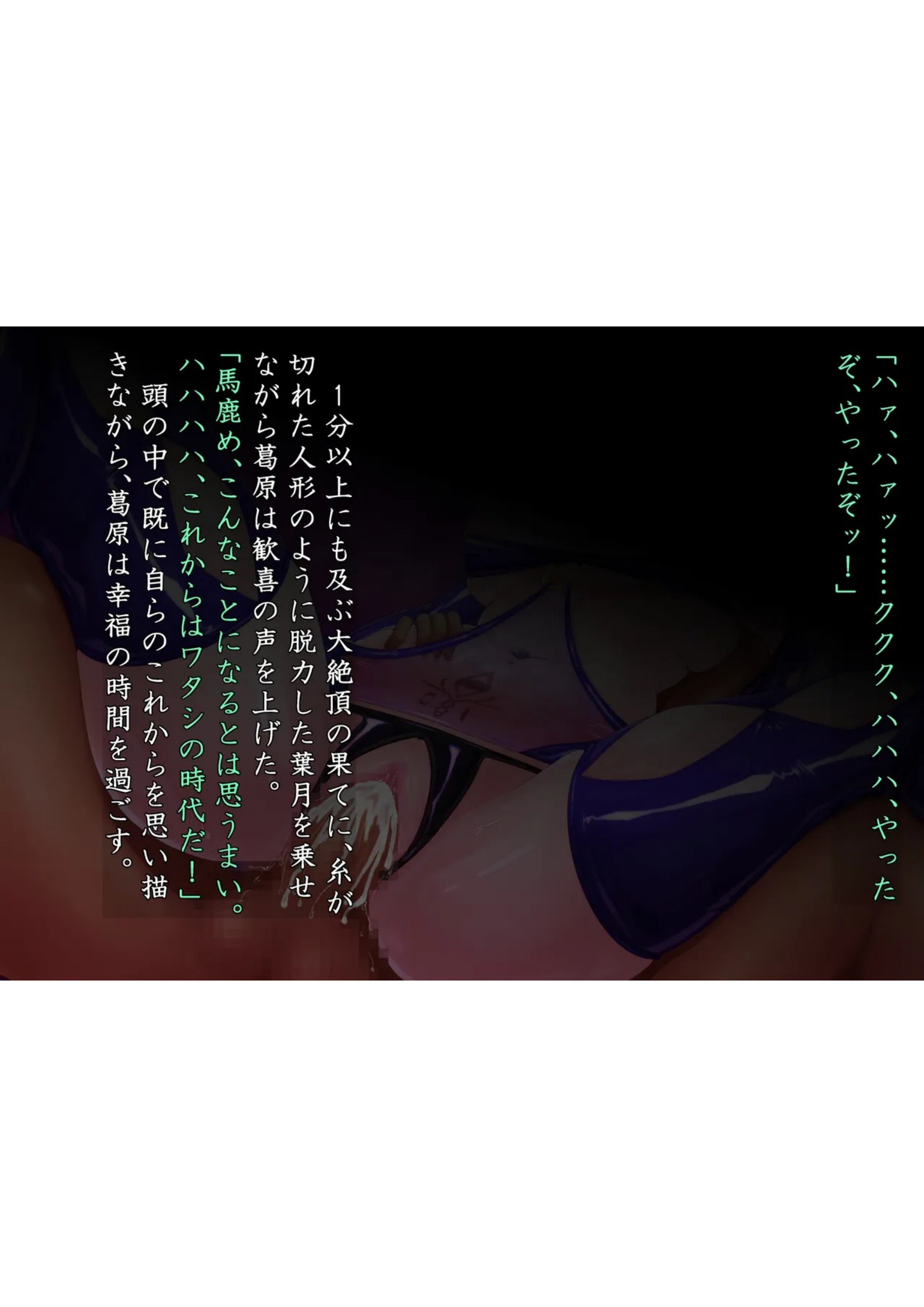












「ハア、ハアッ……ククク、ハハハ、やったぞ、やったぞッ！」

1分以上にも及ぶ大絶頂の果てに、糸が切れた人形のように脱力した葉月を乗せながら葛原は歓喜の声を上げた。

「馬鹿め、こんなことになるとは思うまい。ハハハハ、これからはワタシの時代だ！」

頭の中で既に自らのこれからを思い描きながら、葛原は幸福の時間を過ごす。



「——では、申し訳ありませんが。  
その時代の終わりの時間です」

「ガッ……!!」

葛原の頭を、ガツンという衝撃が襲う。

何が起きたのかを確認しようとした葛原の視界に、細い光の糸が幾本も映った。  
『メイドンドールの所有権の篡奪』——  
こちら約款違反ですので、現時刻を以て終了とさせて頂きます」

いつの間にか意識を取り戻していた葉月が、銀の髪をさらりと流した。



「な、あッ……!! わ、ワタシのものに、な  
ったはず、ではッ……!!」

葛原の言葉に、葉月は優しく笑いかける。

「ふふっ。逆にお尋ねしたいのですが。  
私を捕らえて、執拗に念入りに改造し  
て奴隷人形に仕立て上げ、逆スパイとし  
て公安局に戻して様々な情報の仕入れ源  
とし、それらを全て秘密裏に行える……。  
——そんなご主人様が、『安全措置』を  
設けないとお思いだったのですか?」



「あ、ぐッ、あガア……!!」

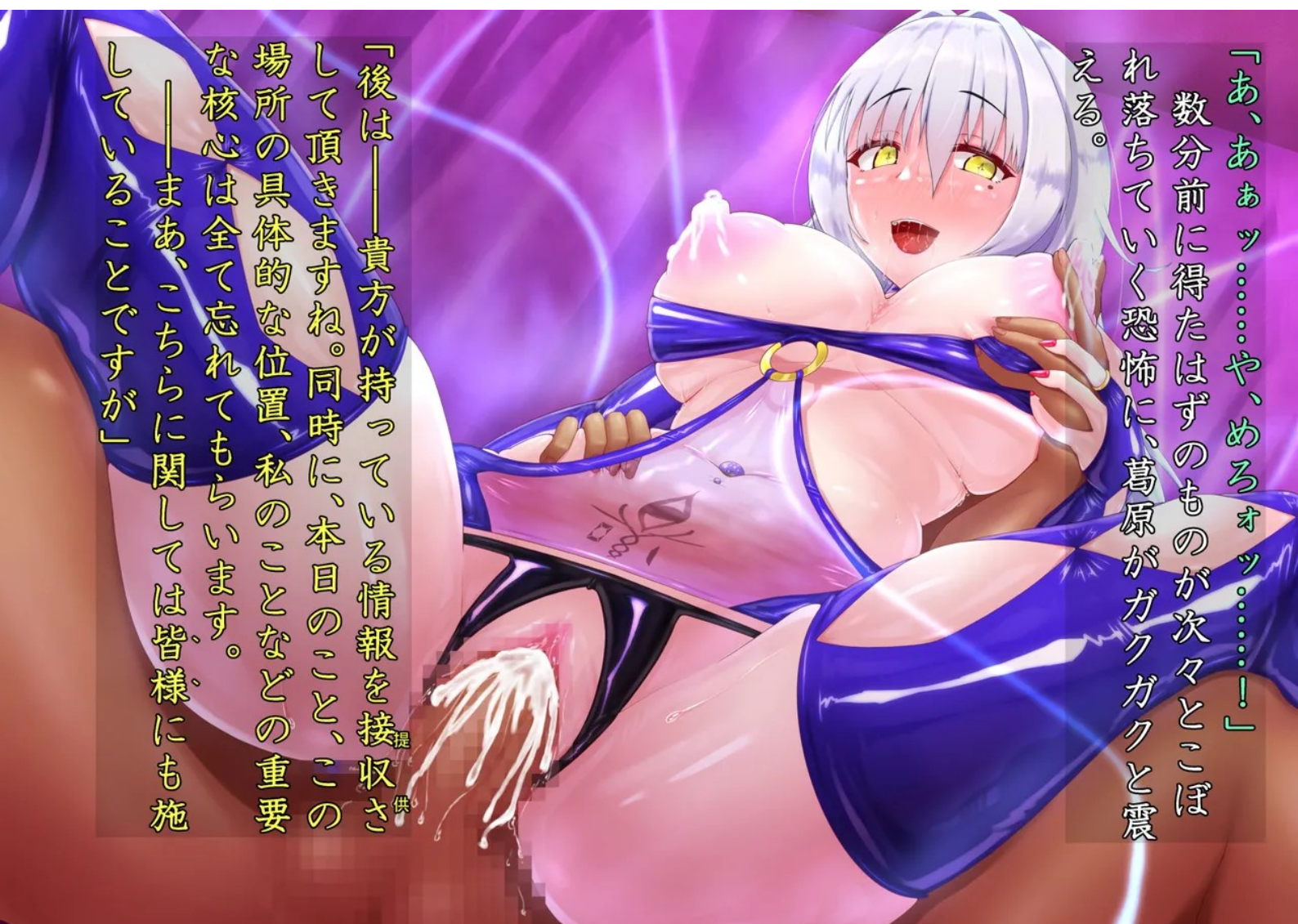
頭に伸びた光の糸から、脳に直接刺激を送られ苦悶する葛原。

「では——約款違反の罰則<sup>ペナルティ</sup>として、本日提供した情報は全て消去させて頂きますね」  
葛原の脳内から、記憶したはずの情報が抜き取られていく。



「あ、ああッ……や、めろオッ……!!」  
数分前に得たはずのものが次々とこぼれ落ちていく恐怖に、葛原がガクガクと震える。

「後は——貴方が持っている情報を<sup>提</sup>接收<sup>供</sup>して頂きますね。同時に、本日のこと、この場所の具体的な位置、私のことなどの重要な核心は全て忘れてもらいます。  
——まあ、こちらに関しては皆様にも施していることですが」



「うーガ、ゴ、オツ——……ん?」  
激痛にのたうち回りながら、その腰がひ  
とりに動き出した。

「意識が明瞭な時に霊系で記憶を操作する  
のは後遺症が残りやすいですからね。今か  
らで間に合うかは分かりませんが、せめて  
最期に絶頂<sup>麻酔</sup>をお送りします。

——本当に。課長には後遺症が何もなく  
て良かった」

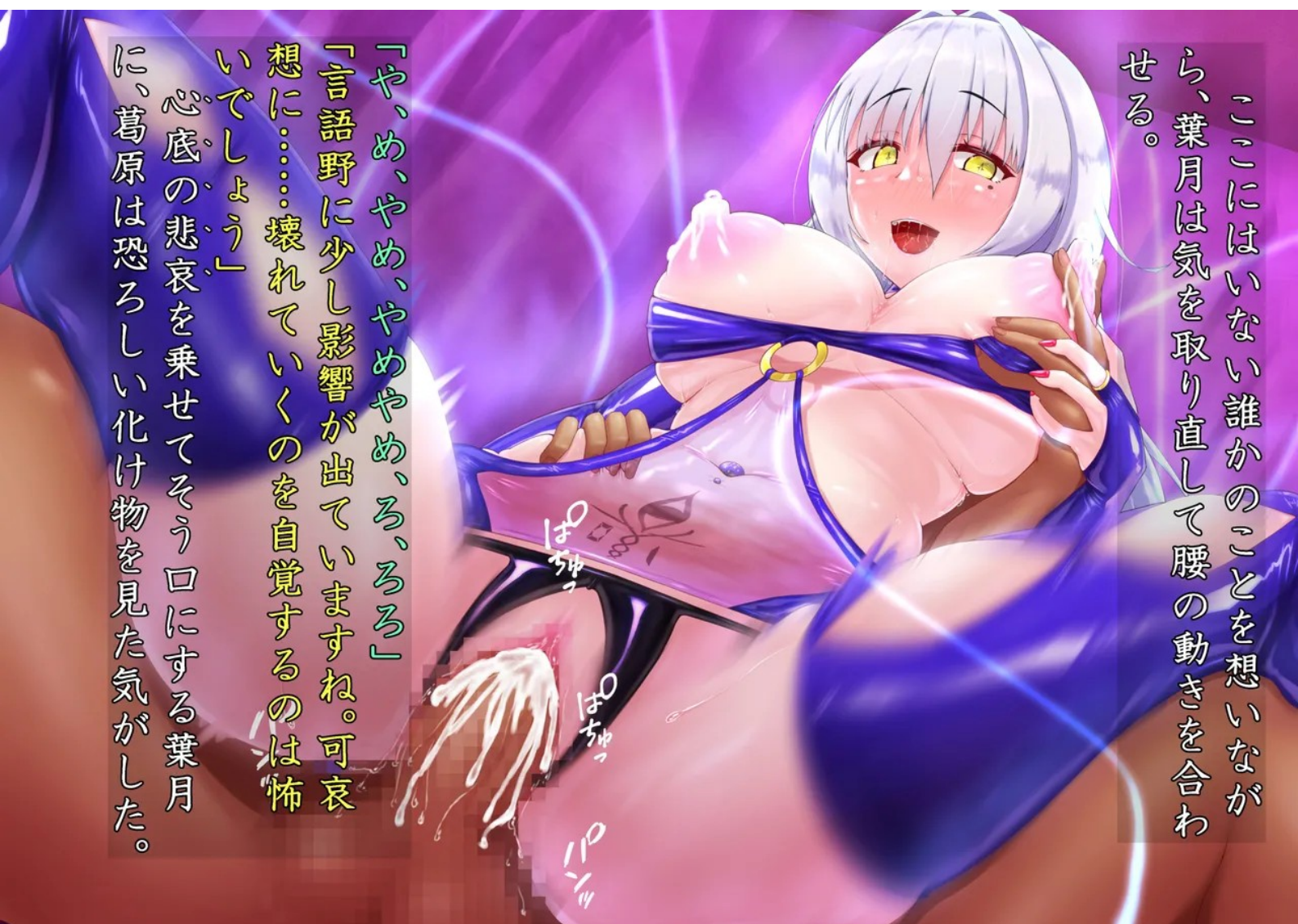


ここにはいない誰かのことを想いながら、葉月は氣を取り直して腰の動きを合わせる。

「や、め、やめ、やめやめ、ろ、ろろ」

「言語野に少し影響が出ていますね。可哀想に……壊れていくのを自覚するのは怖いでしょう」

心底の悲哀を乗せてそう口にする葉月に、葛原は恐ろしい化け物を見た気がした。



「ん、あっ………♥ ふふ、私もそろそろイキ  
そうです。一緒にイって終わりましたようか」

葉月の『終了宣言』に、葛原が精一杯の叫  
びを上げた。

「——あああああああ!! おお、おまおまえ  
まえッ………! こっこ、こうあんあきよきよ  
くののにんげんだだだろろうががあ!!」



「……ええ、そうですね。私は公安局・特務課所属の雪代葉月です」

「犯罪行為も組織も、悪辣に属するものは全て憎いですし、到底許せません」  
「ただ、だったたらたらたらあッ——」  
「——でも、ご存知でしょう？」



「私は——『メイドンドール01』なんです。  
私の全てはご主人様のご命令が最優先」

「許せない悪辣も、許容できない辛辣も……  
ご主人様がやれと仰るならやります。  
それが雪代葉月——元・人間の奴隸人形  
である私の存在意義ですから」



泣きそうな笑顔で葉月がそう告げると、  
葛原は既に聞こえていない様子で腰をガ  
クガクと震わせていた。

「ああ、もう駄目なんです。ではそろそろ  
終わりましたようか。さーん……にーい……」

「ッッ!!」  
カウントダウンが進む。葛原の痙攣が大  
きくなる。

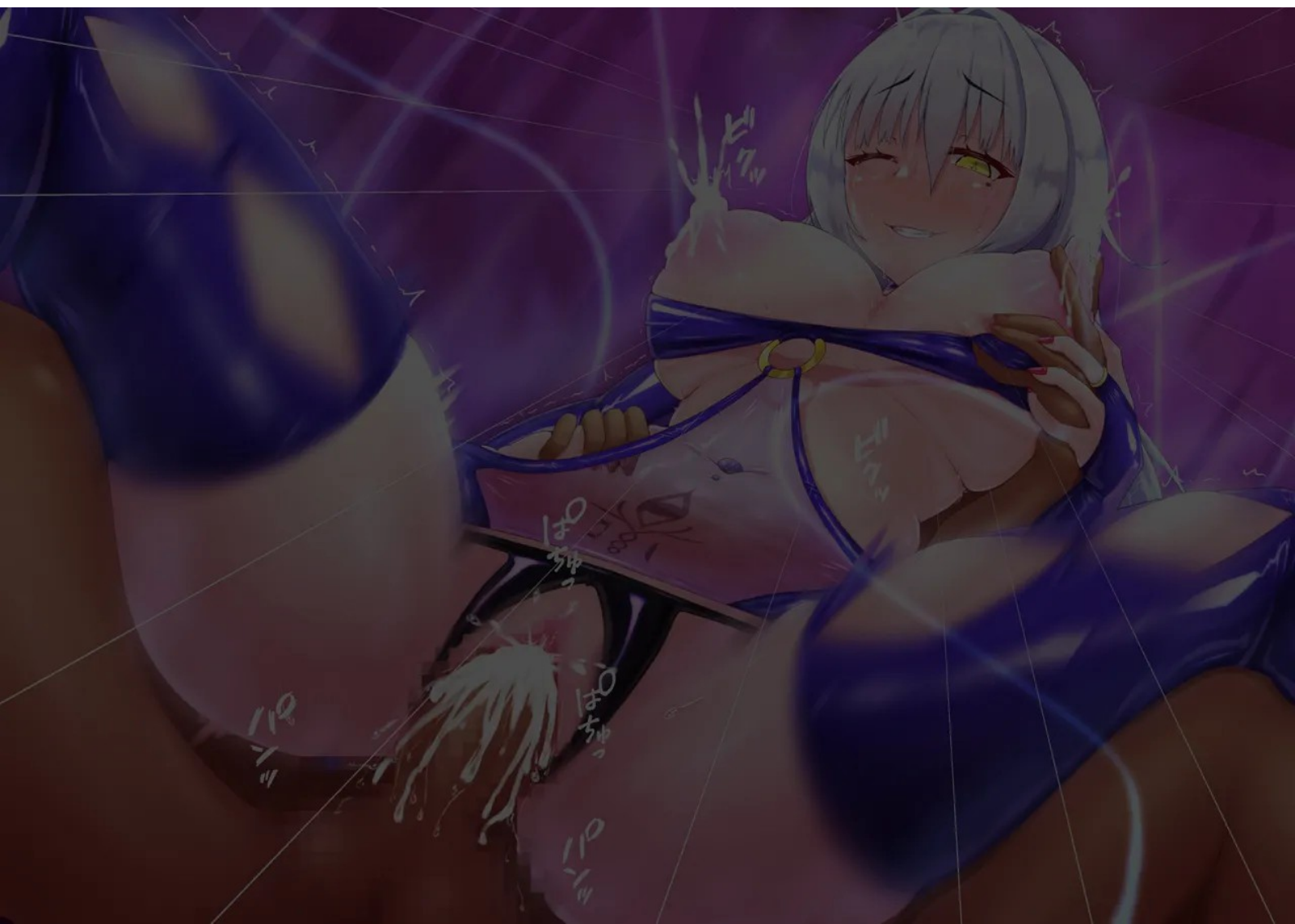
「いーちっ……♡」

容赦など一切なく、葉月はそのまま最期  
を告げた。











長くもあり、短くもある射精が終わると、ゴポツと音を立てて葉月のヴァギナから白くドロっとした精液が垂れ落ちる。



「——はい、ご主人様。元公安局総監補佐の葛原の対応が終わりました。

……はい、はい……わかりました。擬態して後、通常通り出勤します」

いつの間にか出現していた小さなモニターに向かって報告をし、葉月は引き続き日常に戻る旨を告げて通信を切った。

「——全部本心、ですから」

「課長、姉さん。私、力の限り抵抗してしま  
うだろうけれど——」  
誰が聞いているでもない。  
だからこそ葉月は心からの願いを口に  
した。  
いつかそれが叶うことを夢見て——。

